

「学校教育とメディアリテラシー」

誰

もが発信できる時代。
 情報が氾濫する社会のなかで、
 視聴者は正しい情報、信頼できる
 情報を見定めていく必要がある。
 こうした状況を反映して、
 学校教育の場でもメディアリテラシー^{*1}の
 重要性が叫ばれている。
 教師として、研究者として…。
 メディアリテラシーの実践に奔走する
 川崎市立西生田中学校の
 中村純子氏に聞いた。



中村 純子

川崎市立西生田中学校国語科教諭

プロフィール

川崎市の公立中学校で国語科教諭を続けるかたわら、横浜国立大学大学院で修士号取得。その後、東京学芸大学大学院でメディアリテラシー教育の歴史的系譜を研究し、先進的な教育カリキュラムとして評価されている西オーストラリア州を訪ね、今後の教育とメディアの関係を探る。現在は川崎市立西生田中学校に復職し、現場での実践に取り組んでいる。

NHK放送評価調査で「信頼」向上

2010年3月の「放送評価調査」^{*2}では、「信頼」が前年度、前々年度と比べて伸び、20代でもその傾向が示されています。視聴者の多くが、NHKが届ける情報に対しての信頼は向上していると評価しています。

社会に目を転じると、パーソナルメディアをはじめとした様々なカタチの、様々な次元のメディアが姿を現しています。メディアに関わる人間もプロと素人という単純な図式ではなく、プロでも素人でもない多くの人が動画投稿サイトやブログを通じて情報発信しています。

情報が洪水のように氾濫する社会の中で、どれが正しい情報で、どれが信頼できない情報なのか。慎重な見定めが必要です。こうした社会状況において、視聴者側のメディアリテラシーの向上は一層重要になってきます。

中村純子さんは、中学校の国語科教諭であり、東京学芸大学大学院博士課程にて、メディアリテラシー教育の歴史的系譜や、諸外国の教育カリキュラムのあり方について実践的な研究をおこなっています。

- ・中学生はメディアとどう接しているのか。
- ・メディアリテラシー教育の重要性とは。
- ・教師の立場からNHK教育テレビに求めることは。

これらの点を中心に「学校教育とメディアリテラシー」について伺いました。

メディアリテラシーは人をエンパワーメントする

——どのようなきっかけから、メディアリテラシーに興味・関心を持ったのですか。

生徒が意欲的に取り組める面白い授業を作りたい。これがメディアリテラシー教育研究に取り組んだきっかけでした。実は、メディアリテラシーという言葉と出会う前に、テレビのドラマを使った授業をしていました。

中学二年の国語の教科書教材に『北の国から』^{※3}のシナリオがありました。母親との別れの日に兄妹の気持ちがぶつかるシーンを八コマの絵コンテで表現させたのです。班ごとにアイデアを出し合い、プレゼンテーションをしました。兄が妹に「冷血動物だ」というセリフがあるのですが、その一言でもどんな表情なのか、カメラでどう映すのか、いろいろな解釈が出て、たいへん盛り上がりました。その後、実際のドラマをテレビで見ました。この時、普段はなかなか席につかない生徒が、教科書のシナリオと読み比べながら画面に見入っていたのです。その時に「映像の魅力です。これは授業に使える！」と思ったのです。

ちょうどその頃、カナダのオンタリオ州^{※4}のメディアリテラシーのテキストの翻訳や、菅谷明子さんの岩波新書の『メディア・リテラシー』を読んで、自分がやりたかった授業はこれだと思いました。

私自身も国語という文学作品や説明文を読んだり、作文を書いたり、文字中心の学習と違っていい。しかし、文字で描かれたものを映像で表現するとき、読解力が必要となります。例えば、「海」といっても、岸壁の切り立つ海なのか、穏やかに波が打ち寄せる砂浜なのか、作品の内容が持つコンテキスト（背景）や解釈する人の経験のコンテ

クストによって違ってきます。どう解釈し、どう表現するか。これが国語科で育みたい言葉の力だと気がついたのです。

——中村さんの考えるメディアリテラシーとはどのようなものでしょうか。

文字や音声や映像で表現された情報を読み解き、クリティカルに分析し、自分の表現に活かす力、これがメディアリテラシーです。「クリティカル」という言葉が「批判的」と訳されていますが、「あげ足を取る」という意味ではありません。「多角的に吟味、分析することと捉えてください。テレビ局では、1つの事柄を、どう切り取って伝えるのか、どんなアングルで描くか、アップとルーズどちらで撮るか、仕事として当たり前に取り組んでいることですよ。その過程を授業にも取り入れていきたいのです。テレビ番組の制作過程を学習することによって、普段、テレビを見ているときに、何が描かれていないのかを考えたり、こうすればもっと面白いかもしれないと、クリティカルに分析できるようにすると日常生活が豊かになってくると思うのです。

水越伸さん^{※5}の著書『デジタル・メディア社会』の一節に、「メディアリテラシーを身に付けることで市民がエンパワーメントする」とあります。エンパワーメントとは、一人ひとりが元気になる、活性化されていくという意味です。この言葉に惹かれました。メディアリテラシーを身に付け、よりよく情報を活用し、力強く生きるシチズンシップを育んでいきたいです。

二〇世紀までは、マスメディアが一つの権力という大きなシステムで、視聴者の意識に大きな影響を与えると考えられていました。メディアリテラシー教育はそれに対抗

※1「メディアリテラシー」

情報が流通する媒体（メディア）を使いこなす能力。メディアの特性や利用方法を理解し、適切な手段で自分の考えを他者に伝達し、あるいは、メディアを流れる情報を取捨選択して活用する能力のこと。

※2「放送評価調査」

NHKの放送に対して文研が年4回おこなう調査。全体評価の項目は「信頼」「満足」「親しみ」「独自性」「社会貢献」の5つで、「信頼」「社会貢献」が高いが、「親しみ」がやや低い。年齢があがるほど各項目の評価は高くなるが、世代間の格差は縮まる傾向がある。

※3「北の国から」

フジテレビで放送されていた、北海道富良野市を舞台としたドラマ（1981～2002年／脚本・倉本聰）。全22話の連続ドラマ放送後、「83冬」「84夏」「87初恋」「89帰郷」「92集立ち」「95秘密」「98時代」「2002遺言」の計8編のスペシャルドラマが放送された。

※4「カナダ・オンタリオ州」

世界で初めて公教育にメディア・リテラシーのカリキュラムを取り入れた州である。

できる力を身に付けるものとして始まりました。戦争へのプロパガンダや商業主義のコマーシャルなど、メディアのバイアスを見抜き、マスメディアを批判することが教育目標でした。

しかし、二一世紀に入り、高度デジタル情報社会となり、マスメディアとパーソナルメディアとの境界線が薄れてきています。誰もがインターネットを通じて世界中の人に情報を発信できるようになりました。

メディアリテラシー教育も単なるマスメディア批判ではなく、今のメディア状況にあった教育目標が必要です。

例えば、「あるある大事典Ⅱ」^{※6}の問題でいえば、「こんな風に情報を改ざんしていた。だから、テレビはいけない」ではなくて、「ああいう番組がどうして作られたのか」を考えていくべきでしょう。今はダイエットや健康がブームだから、視聴率が取れると考えて制作者は番組の企画を立てたのでしょうか。実際に、納豆がスーパーの店頭で品切れになりました。結局のところ、こうした番組を作らせているのは、視聴者である自分達であり、世間の流行や価値観ではないかと、冷静に気付くことも必要でしょう。つまり、情報をとりまく社会的、文化的コンテキストをクリティカルに分析するのです。さらに、テレビの情報が怪しいとわかっていても納豆をついつい買ってしまう自分を笑っちゃえるような、自分自身に対するクリティカルな分析力も必要でしょう。

どんな社会の中で自分たちが生活しているのか、自分の価値観や判断基準は何なのかを理解し、自分自身をクリティカルに分析する力を育むことを、二一世紀のメディアリテラシー教育の目標としていくべきだろうと考えています。

——今の中学生は、メディアとどう接しているとご覧になっていきますか。

今の子供たちはまずテレビを放送時間どおりに見ていません。大抵、録画再生でコマーシャルを飛ばしたり、ドラマでもここはかったるいからと三倍速で飛ばして視聴しています。短時間で大量の情報処理することに慣れているのかもしれませんが、集中力のスパンがとても短くなっているように感じます。授業でも生徒の集中力が途切れないうちに、流れやリズムを工夫しています。

また、面白い番組は YouTube など誰かがアップしたのから選んで見ているようです。映像編集がコンピューターで簡単にできるようになりましたから、素人のパロディー作品などから面白い映像を見つけきて、友達と一緒に見て遊んでいるようです。

例えば、マクドナルドのドナルドのセリフをアニメの歌とリミックスした作品だったり、宮崎駿さんの映画と『デスノート』^{※7}のセリフとコラボした作品などだったりします。アニメの実写版として高校生くらいの人たちが演技している作品もありましたね。本当に自由自在に映像で遊び、発信できるようになりました。

だからこそ、今の中学生には自分自身とメディアの関わりをクリティカルに分析できるメディアリテラシーが必要だと思えます。自分は何を規準に情報を選んでいるのか、自分が発信する映像はマスメディア情報からどんな風に影響されたものなのか、自分の映像作品を見た人はどんな反応を示すと考えられるのか、情報に対して自己を律することができるようになってほしいものです。

※5 「水越伸」

東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授。放送からネット、ラジオに至る様々な領域で、情報技術とメディアの動態を、人間・社会の側から捉えなおす「ソシオ・メディア論」に取り組み。1997年に発刊した日放論文庫『メディアリテラシー』の編者。

※6 「発掘！あるある大事典Ⅱ」

P250参照

※7 「デスノート」

原作・大場つぐみ、作画・小畑健のダークファンタジーミステリー漫画。人を死なせる力のある死神のノート「デスノート」で犯罪者を抹殺し、理想の世界を作ろうとする主人公、殺人を続ける彼を追う名探偵とその後継者との闘いを描く。2006年に映画化された。

PISSAテストとメディアリテラシー教育

——これから学校教育の中でメディアリテラシーは、どう位置づけられていくのでしょうか。

メディアリテラシーは母語教育、つまり国語教育の基本に位置づけ、情報科や社会科など全ての教科と連携して指導していくべきだと考えています。

最近、OECDが実施した学力調査、PISSAテスト^{※8}の読解リテラシーでは、日本の順位が少し下がったことが話題になりました。このテストは義務教育を修了した十五歳を対象に、社会に出て働く上で必要な読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシー、問題解決力のレベルを調査するものです。2006年のテストでは56か国が参加しています。

この読解力の問題ではメディアを活用する問題がたくさん出されました。例えば、インフルエンザの予防接種のポスターや仕様説明のパンフレットから必要な情報を取り出す問題や、ドラマの脚本から登場人物の舞台の立ち位置を考える問題などが出題されました。生活や仕事で活用する読解力が試されるわけですから、当然、メディアを活用する内容が関わってきます。さらに、そのメディアの情報を自分の考えと照らし合わせて評価するクリティカルな分析力が求められています。日本では文学作品を中心に筆者の主張を正確に読み取る読解指導がなされてきましたから、自分の考えを問われる記述問題には生徒達もとまどったようです。



文部科学省ではPISSAテストの結果を意識して、平成二十年版の国語科学習指導要領では新たな対応を打ち出しました。小学校中学年で絵や写真から題材をとってスピーチをする言語活動例が示されました。小学校高学年や中学校ではテレビやインターネットを活用して書くことの題材を見つかったり、高等学校では文字、音声、画像を用いた創作的な言語活動も入ってきました。メディアリテラシーが必要とされる内容が盛りだくさんです。私は日本のメディアリテラシー教育にとって、PISSAテストは黒船来港のような効果があったと思っています。

——メディアリテラシー教育はどのようなカリキュラムで行われていくことが望ましいですか。

日本では、国語科で言語表現や内容分析、社会科でメディア産業、情報科で情報モラルを学ぶといったように、各教科の領域でメディアリテラシー教育の内容が部分的に扱われています。しかし、高度デジタル情報社会となった現在、教科を横断し、メディアの全体像を統合したカリキュラムが必要だと考えています。

イングランドやカナダのオンタリオ州、西オーストラリア州の公教育のカリキュラムでは「情報科」とは別に「メディア・スタディーズ」というメディア専門の教科があります。メディアの形式やコード、オーディエンスやコンテキストの分析やメディア産業に関する学習を統合的に扱う教科です。西オーストラリア州は世界で初めて小学校から高等学校までの全学年の公的カリキュラムにメディアリテラシーを導入したことで有名な地域です。私は西オーストラリア州パースにこれまで四回、授業の視察に行き、メディアリテラシー教育の手がかりを探ってきました。

※8「PISSAテスト」
OECD（経済協力開発機構）による国際的な生徒による学習到達度調査のこと。これまで2000、03、06年、09年に調査を実施。03年の調査で日本の順位が下がったことが学力低下の証拠として国内で大きく報道された。当時の中山文科相は学習指導要領全体の見直し、教員の指導力向上、全国学力調査（全国すべての小学5年生と中学2年生が参加）などの改善策を表明した。

まず、教科内容の捉え方が先進的なことに驚きました。

母語教育としての「英語科」では、「話すこと・聞くこと、読むこと、書くこと」だけではなく、「見ること」という指導項目も設定されていました。文字や音声だけでなく、映像も扱っているのです。ですから、「英語科」、つまり日本の国語科にあたる授業で、映画やテレビやウェブサイトを教材として扱っています。メディアリテラシーの内容を含む英語科は小学校低学年から高等学校までの段階で系統的に取り組んでいます。

また、中学校からは「アート科」で絵画やダンス、ドラマの他に映像メディアの制作も扱います。「技術科」ではコンピュータを活用した情報収集や映像編集も含んでいます。このようにメディアリテラシー教育が二つの教科を横断し、有機的に関連して位置づけられています。

そして、高等学校ではさらに社会学の内容も含む「メディア・スタディーズ」という教科が専門教科として設定されています。七年前にこの教科は「メディア制作と分析」という名称に替わり、内容も一新しました。教科の名称にあるとおり、生徒達は始めにラジオ番組や映画の1シーンなどの制作課題に取り組みます。そして、自分達の作品を使って分析方法を学んでから、調査課題でマスメディア情報の分析を行います。メディア作品が表象するステレオタイプや社会的コンテクストなどを分析します。

オーディエンスの分析などの難しそうな内容も実は小学校の段階から少しずつ指導されてきているのです。小学四年生の英語の授業では、いくつかのテレビ広告を視聴し、誰をターゲットにしているかを考える授業をしていました。映像制作でも、小学五年生の授業では、理科や図工の学習成果や読書感想などの映像レポートを国語の授業で作って

いました。子ども達がカメラを操作していますから、仕上がりは素朴ですが、作文を書くことと同じように映像を作っていました。これらの映像作品は保護者向けにはパスワードを使って入れる学校のサイトで公開し、音声だけをラジオ番組としてポッドキャストを使って世界に配信しています。アフリカやニュージールランドなどからの感想も寄せられ、国際交流をしていました。先生がゲートキーパーとしてきちんと情報管理をしています。子どもたちにも指導が行き届いていて、悪意のある書き込みを見つけると、「先生！変なメールが届いているよ」とすぐに報告にくるそうです。メディアを積極的に活用して、情報に対するモラルや対処の仕方にも身につけているそうです。

このようにメディアリテラシー育成に積極的に取り組んでいるのは西オーストラリア州だけではなくあります。ニュージールランドでは母語教育としての英語科に「見ること」だけでなく「見せること」の指導項目もあります。カナダのオンタリオ州の英語科では、四年前から「話すこと、聞くこと、読むこと、書くこと」に「メディアリテラシー」という指導項目が設定されています。

これらの国は2001年からのPIISAテストの読解力の部門では、いずれも八位以内をキープしています。日本の国語教育も追いついていきたいものです。

そんな思いをこめて、平成二十年度に総務省の放送分野におけるメディアリテラシー教材開発[※]。監修をさせていただきました。「情報娯楽番組（インフォテインメント）の〈制作〉と〈分析〉の授業実践」です。西オーストラリア州の教科「メディア制作と分析」の分析理論を参考にして、ツツコミどころ満載の映像教材と一時間から三時間という少ない授業時数に対応した指導案を作りました。いずれも3M

※9 「総務省・放送分野におけるメディアリテラシー教材開発」

総務省では平成十年より、メディアリテラシーの向上と普及を目的に、メディアリテラシー教材を開発し、教材の貸出しやHPでの掲載を行っている。

http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/joho_tsusin/top/hoso/kyoiku.html

B以下で、ウェブからダウンロードできます。多くの方に活用していただきたいです。

NHKはクリエイティブライブラリーの充実を

——メディアリテラシー教育を展開していく上で、NHKにはどんなことを期待されていますか。

いま中学校の国語の授業は週3時間しかないのです。その中で文法も、古典も、文学作品も指導していかなくてはなりません。メディアリテラシーの要素を織り込んで工夫してはいますが、やはりそれだけを教えるわけにはいきません(笑)。このように時間の制約があるので、短時間で手軽に扱える映像教材をNHKでも提供していただけると助かります。

NHKの「クリエイティブライブラリー」※10では著作権フリーの映像を提供して下さっていて注目しています。ただ、断片的なイメージ素材ばかりなので、ストーリーを作るのが難しそうです。完成作品が公開されていますが、タイトルイメージを音楽でつないだ感じで、ストーリー性は出しにくいようです。

要望としては、一つのニュースを多角的に取材した素材をいくつか提示してみたいです。例えば「動物園で動物の赤ちゃんが生まれました」というほのぼのとしたテーマで、飼育係やお客さんや動物学者のインタビューとか、あるいは赤ちゃんをロングで撮ったものと、アップで撮ったものや、動物の生態系の説明など、バリエーションのある映像素材があれば、生徒はどの観点からどのようにニュースのストーリーを組み立てるかを考えることができます。こうした制作活動がメディアリテラシー育成の基本です。NHKには著作権フリーの素材をどんどん提供してくれる

ことを期待しています。

——メディアリテラシーといえば、NHKオンラインで『リテラ針盤』※11という取り組みをしています。

NHKオンラインの『リテラ針盤』は、メディアリテラシーと称していますが、内容は情報モラル教育のようです。情報モラルはメディアリテラシーに含まれる重要な課題ですが、混同してはいけないと思います。むしろ、先ほど話した「クリエイティブライブラリー」こそメディアリテラシーの看板にふさわしいものでしょう。

——NHKの教育テレビについて、教師の立場からどのような印象を持っていますか。

私はNHKの番組を授業でよく活用しています。例えば平家物語など教科書教材に関連した特集をやっていたら必ず録画して授業で使うようにしています。けっこう重宝しています。勤務校でも電子黒板にランケーブルが接続されましたので、ウェブ教材も活用していこうと考えています。NHKのデジタル教材『10min・ボックス』※12もよいのですが、国語の教材は文学作品中心で印刷メディアの資料集感覚で作られているように感じられます。もう少し映像勝負といえますか、メディアリテラシーの分析テキストとしても使える新しいデジタル教材を作ってほしいですね。期待しています。

※10「クリエイティブライブラリー」

NHKアーカイブスの番組や番組素材から切り出した映像や音声、表現・創作活動に利用するための創作素材として、インターネットを通じて提供する無料のサービス。ダウンロードした素材は編集したり、他の素材(自分で撮影した映像や写真)などと組み合わせたりしてオリジナルの作品をつくることができる。作品は利用規約のもと、ブログや動画投稿サイトに掲載できる。

※11「リテラ針盤」

NHK教育テレビ50年を契機にネットやデジタル社会を正しく歩く術や知識について親子で考えるキャンペーンを展開中。このHPを通じて、メディアリテラシーが学べるクイズや、ネットを歩くための最新トピックスをわかりやすく解説した動画を紹介。

※12「10min・ボックス」

ETVで放送されている中学・高校生向けの教養ミニ番組。国語、理科、社会、総合学習などに系統が分かれており、それぞれ学校の授業で放送映像を活用することを目的とした番組。内容別に何回かのシリーズにして放映している。

「私自身、メディアリテラシーというと、歴史的経緯からしても、メディアを批判的に読み解くという印象をもっていました。批判的な視聴者を育て、メディア規制への気運が増すといった点で、放送を窮屈なものにするのではないかと考えていたからです。」

しかし、中村さんから「クリティカルに分析する力を育む」という積極的な意味を聞いてとても共感を覚えました。情報が氾濫する社会だからこそ、メディアリテラシーを学ぶことによって、逆にNHKの提供する情報の価値が高まっていくのではないかと思いました。

NHKを含めて放送事業者はメディアリテラシーに取り組んでいますが、国内外の事例紹介や放送体験をできる場の提供にとどまっているのが現状です。

今後は、NHKがメディア教育にどう関わっていくか、視聴者からのアクセスにどう対応していくかといった取り組みをさらに積極的におこなっていく必要があると感じています。こうした取り組みこそが、デジタル時代の公共放送に与えられた新しい役割になるのではないのでしょうか。

報告 中央放送部長 小磯亮